

西日本でカシワを食樹としている ウラジロミドリシジミの記録

永幡 嘉之

I. はじめに

ウラジロミドリシジミ *Favonius sapharinus* が、東日本ではカシワを、西日本ではナラガシワをそれぞれ食樹としていることはよく知られている。西日本でも、対馬や隠岐など、日本海の離島ではカシワを食樹としている¹⁾。

兵庫県でも、過去にカシワから本種の卵を採集したという報告がある²⁾。筆者は、このたび西日本でカシワを食樹としているウラジロミドリシジミを複数の場所で確認したので、報告する。

II. 兵庫県北西部および鳥取県東部におけるカシワとナラガシワの分布

今回の調査地は、兵庫県北西部と鳥取県東部である。この地域におけるカシワとナラガシワの分布については、すでに1993年に報告した³⁾。それ以後新たに判明した知見を加筆した分布図が、図1である。

ナラガシワは、低標高地に分布するが、山陰地方では大きな群落を形成することはほとんどなく、二次林の中に局地的に認められる。谷沿いに多いが、山腹の斜面にみられることもある。

カシワの分布地は2通りに大別される。山地のススキ草原で疎林を形成するものと、海岸の岩角地に生えるものの2つである。前者は標高500m以上の山地に多く、後者は内陸部まで侵入せず、両者の分布は連続していない。

ナラガシワ、あるいは山地のカシワを食樹としているミドリシジミ類については過去によく調査されているが、海岸のカシワについてはこれまでに調査された例はないようである。今回ウラジロミドリシジミが発見されたカシワ林は、標高の低い地域のものが多く、カシワが低標高地に分布しているというこの地方での分布特性をふまえておく必要がある。

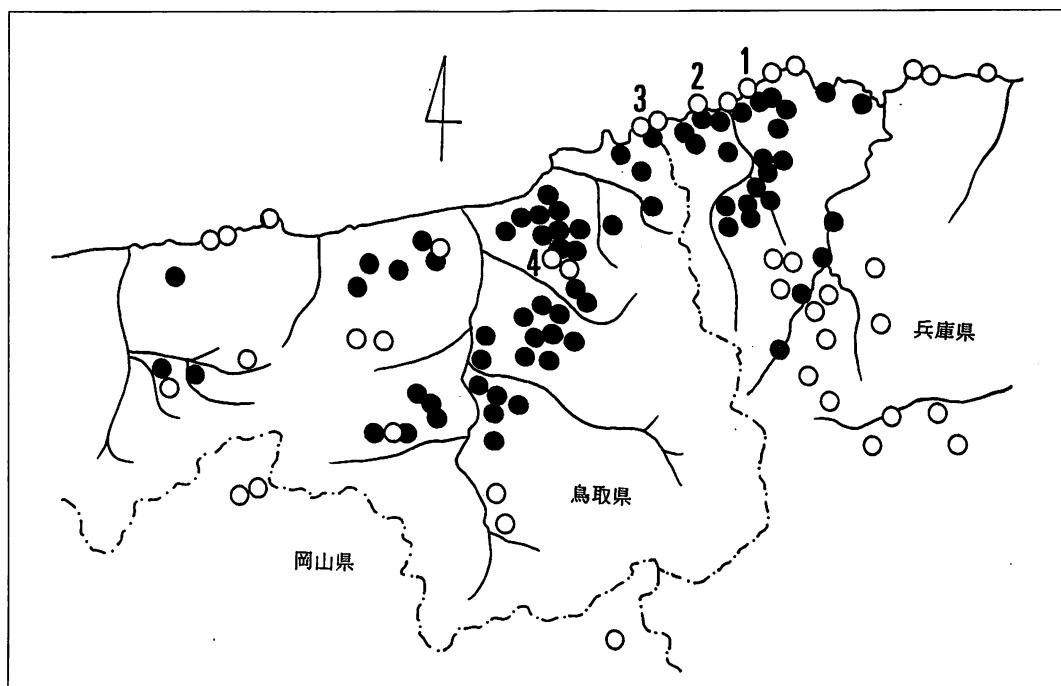


図1 兵庫県北西部および鳥取県東部におけるカシワ・ナラガシワの分布概念図
(○ カシワ, ● ナラガシワ). 図中の数字は、本文中に出てくるカシワ食のウラジロミドリシジミの産地を示す.

1. 浜坂町田井, 2. 浜坂町城山, 3. 浜坂町居組, 4. 国府町高岡

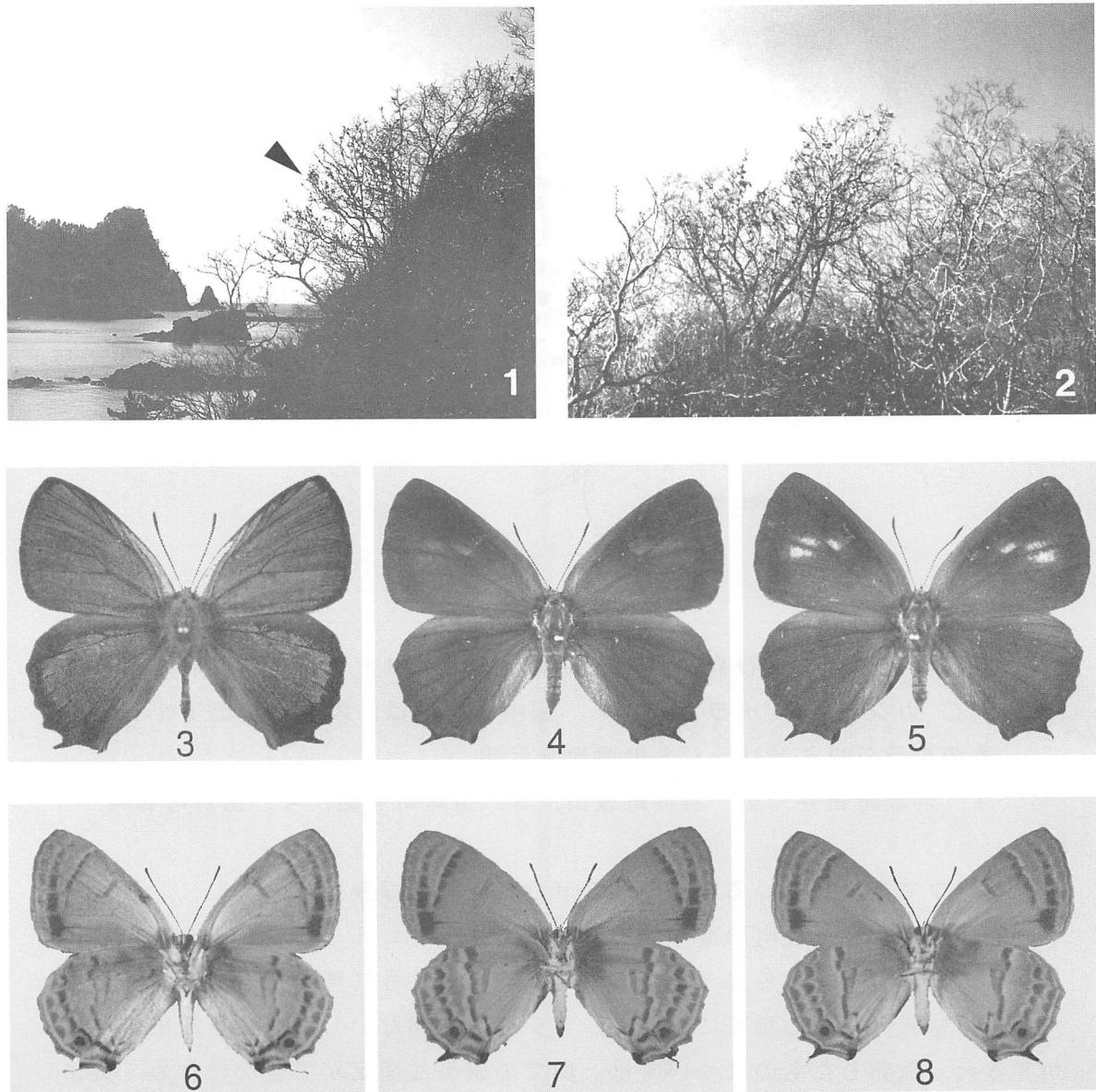
III. カシワで発生しているウラジロミドリシジミの採集記録

1991年6月に、浜坂町の海岸のカシワ林でウラジロミドリシジミを採集したことから、当地方におけるウラジロミドリシジミの食性に興味をもち、調査を行った。その結果、以下の場所において、カシワから卵ないしは成虫を採集することができた。採卵したものについては、卵での確実な同定ができないため、羽化した個体のデータを示した。また、飼育に際しては、カシワの開芽がふ化に間に合わなかったので、やむを得ずナラガシワを使用したことを付記しておく。

1. 美方郡浜坂町田井

1♂, 1-VII-1993, 永幡嘉之

海岸に面した斜面のカシワで、成虫を採集した。他にも数度目撲しているが、カシワの本数が少ないため、個体数は少ないのである。内陸側の斜面にはナラ



1. 海岸のカシワ自生地の景観. 矢印部にカシワがみられる（浜坂町城山）.
2. 海岸のカシワ. 他の樹木に混じって生育する（同地）.
- 3～8. カシワ食のウラジロミドリシジミ成虫（飼育品）.
3. ♂表面（浜坂町居組産） 4. ♀表面（浜坂町居組産） 5. ♀表面（A型, 国府町高岡産） 6. ♂裏面（浜坂町城山産） 7. ♀裏面（浜坂町城山産） 8. ♀裏面（浜坂町居組産）.

ガシワが少數見られ、両者の分布は部分的に重なる。成虫はこれまでカシワのみから確認している。

2. 美方郡浜坂町城山

- 1 ♂, 22-VI-1991, 永幡嘉之
 1 ♀, 19-VI-1992, 永幡嘉之
 1 ♂, 21-VI-1992, 永幡嘉之
 採卵 (31-I-1993, 10-II-1993, 13-II-1993) 永幡嘉之
 6 ♂♂ 3 ♀♀ 羽化, 18~23-V-1993

1991年には、成虫が夕刻蝶道をつくって次々と飛翔する様子を観察したが、以後は1日に数頭を目撃する程度である。

カシワは海に極めて近いところから尾根上まで広く分布しており、卵はいずれの場所でもみつかる。ここでも内陸側の斜面にはナラガシワがみられ、一部でカシワと混生しているが、ナラガシワからは卵は発見していない。

3. 美方郡浜坂町居組

- 1 ♂, 29-VI-1992, 川元 裕
 1 ♀, 17-VI-1993, 永幡嘉之
 1 ♂, 22-VI-1993, 永幡嘉之
 1 ♂, 16-VI-1994, 永幡嘉之
 採卵 (19-XII-1992, 11-II-1993) 永幡嘉之
 2 ♂♂ 5 ♀♀ 羽化, 20~24-V-1993

1992年6月に♂を目撲し、同年川元裕氏によって採集された⁴⁾。冬季の採卵では、尾根上から海岸付近までの広い範囲でカシワから卵を採集した。ナラガシワは、ここではコナラとの中間的な形態をしたもののがわずかに見られるのみで、数も少ない。また、カシワとコナラの中間的な形態をしたものもみられる。

4. 岩美郡国府町高岡

- 採卵 (24-I-1993) 永幡嘉之
 6 ♂♂ 3 ♀♀ 羽化, 16~23-V-1993

カシワは稻葉山の尾根上一帯に広くみられる。斜面にはナラガシワの、鳥取県内としては比較的本数の多い林があり、一部でカシワと分布を接している。卵は

カシワとナラガシワの両方に産卵されており、嗜好性についてはとくに差はないように思われた。ナラガシワ林にカシワとコナラの中間的な形態をしたものが少數混じっており、それからも卵を採集している。当初、川元裕氏がカシワ林を発見したことから2人で調査をしてきたが、すでに中井（1978）により、カシワに産卵している可能性が示唆されていた場所である⁵⁾。なお、筆者はハヤシミドリシジミは採集していないが、淀江（1994）には国府町宇倍野山が産地として挙げられており⁹⁾、カシワ林で2種が混生している可能性がある。

IV. 幼虫の色彩

本種の終齢幼虫の色彩は、西日本のナラガシワを食樹としているものでは赤色であるが、東日本でカシワを食樹としているものには赤色と黄色の2型があることが知られている。今回カシワから得た個体は、いずれも例外なく赤色であった。

V. ナラ類の分類

本稿には、ウラジロミドリシジミの幼虫が食する樹種としてカシワとナラガシワの2種が登場する。ところが、この2種は変異幅が大きく、ときに種の同定にあたって戸惑うものがある。幸いにしてカシワとナラガシワとの中間的な形態をした個体は見られないが、よく見られるものに、コナラとナラガシワ、コナラとカシワとの、それぞれ中間的な形態をした個体がある。特に山陰地方のナラガシワには、コナラとの中間的な形態をしたものが多い。今回は、それらをナラガシワあるいはカシワには含めなかった。雑種と考えられる個体にウラジロミドリシジミが産卵していた例は、国府町高岡でカシワとコナラの中間的な形態をしたものから2卵を採集、雌1頭が羽化という1例のみであるが、実際には雑種にもかなりの産卵が行われている可能性もある。

VI. 調査の現状と今後の課題

当初は、カシワを食樹としているものとナラガシワを食樹としているものは、それぞれ別の系統である可能性があると考えた。理由のひとつに、浜坂町での生息環境が隠岐や対馬と似ていることが挙げられた。しかし、幼虫の色彩がすべて赤色型であったこと、国府町高岡のように、ナラガシワ林と連続する産地が存在することなどが明らかになり、現在の知見ではナラガシワを食樹としているものとの区別は難しい。さらに最近になって中国地方各地でカシワ林からウラジロミ

ドリシジミが確認される例が相次いでいるので、カシワを食樹としている例は各地でみられる可能性がある。各地でカシワ林からウラジロミドリシジミが発見された例として、以下の場所がある。

兵庫県朝来町土肥²⁾、村岡町兎和野²⁾、村岡町大筈⁸⁾、岡山県上斎原村恩原⁶⁾、島根県大田市三瓶山東の原⁷⁾

今回確認した産地のうち、浜坂町の3カ所は、付近にナラガシワがごく少なく、カシワで世代を繰り返している個体群であると推定される。国府町高岡の産地では、カシワ林とナラガシワ林は近接している。上記に挙げた文献記録のなかにも、カシワとナラガシワとの分布が接している場所と、カシワ林が単独で存在している場所とがある。同一地域でカシワとナラガシワの出芽期を観察すると、通常はカシワが1週間から10日程度遅れる。近い場所に両種があり、どちらにも産卵されている場合、野外でのふ化の時期に差があるのかどうか興味が持たれる。筆者はこの点については全く調査することができなかった。また、野外で幼虫がカシワを摂食しているかどうかの観察もできなかった。

雌成虫が、産卵に際して意識的な選択を行っているかどうかの調査は難しい。現時点では、まだ未発見で眠っているカシワ林の生息地がいくつも存在すると思われる。今後各地のカシワ林で調査を進め、生息している場所の諸条件を明らかにしていくことにより、分布や食性の実態も明らかになってゆくことと思われる。

参考文献

- 1) 福田晴夫ほか (1984) 原色日本蝶類生態図鑑 (III), 保育社, 大阪.
- 2) 高田忠彦・井手敏晴 (1978) 兵庫県産蝶類調査報告 [I],
MDK NEWS28 (79) : 1-69.
- 3) 川元 裕・永幡嘉之 (1993) 因但地方におけるカシワ・ナラガシワの分布について, 因幡のむし28:11-15.
- 4) 川元 裕 (1993) 1992年度採集記録, 因幡のむし28:16-18.
- 5) 中井博喜 (1978) 鳥取市周辺での採集活動報告<1977>, すかしば 9:1-2.
- 6) 小椋 隆 (1989) ウラジロミドリシジミがカシワに発生?, ゆらぎあ 8:17.
- 7) 三島昭一 (1993) 未記録種2種を含む三瓶山のチョウ採集記録 (1993年),
すかしば39/40:52.

- 8) 木下賢司・前平照雄・福井丈嗣 (1986) 但馬地域の蝶類目録, IRATSUME10:55-95.
- 9) 淀江賢一郎 (1994) ハヤシミドリシジミ, 山陰のチョウたち (山陰むしの会編) :57, 山陰中央新報社, 松江.

体にアリの頭部をつけた甲虫の記録

永幡 嘉之

触角や脚に、アリの頭部の死骸をつけたまま活動していた甲虫を2例採集したので、写真を添えて報告する。

アリが衰弱した他の昆虫に襲いかかる光景は時折見かけるが、この2例の場合は、他の健全な昆虫に噛みついた個体が何らかの理由により死亡したものであろう。それほど重要な意味をもつとは思えないが、数少ない例であると思われる。

1. ハンノアオカミキリ *Eutetrapha chrysochlora* (写真1)

兵庫県美方郡美方町小代渓谷 1♀, 3-VIII-1992, 永幡嘉之

サワグルミ伐木に集まっていた個体で、アリは大きさからクロオオアリかムネアカオオアリであると思われる。触角にしっかりと噛みついたまま死んでおり、死骸は頭部のみで、やや古びていた。

2. ハンミョウ *Cicindela japonica* (写真2)

兵庫県美方郡村岡町相岡

1♂, 10-IX-1994, 永幡嘉之

この例では、アリはムネアカオオアリで、わずかに残っている前胸が赤褐色である。死骸は新鮮で、あるいはこの噛みついたハンミョウに食べられた可能性もある。

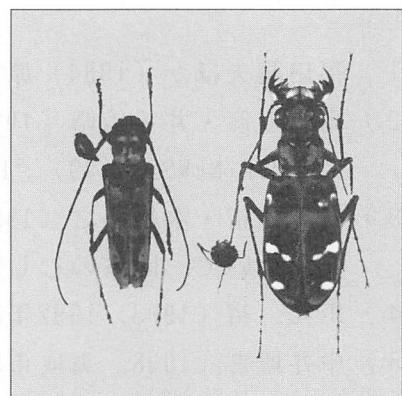


写真1

写真2